

沢田和彦著『プロニスワフ・ピウスツキ伝』に「イースタンレビュー」賞！

2022年7月2日、ワルシャワ大学旧図書館において、第29回「イースタンレビュー」賞の授賞式が行われました。この賞は、1994年に歴史学季刊誌「イースタンレビュー」が創設した、東欧研究の分野で最も優れた書籍に贈られる権威ある賞で、毎年、歴史学、法律学、政治学、民族学の分野で多くの出版社や著者が応募しています。

審査委員長はヤン・マリツキ Jan Malicki 教授で、授賞式のホスト役を務めました。

多くの国の書籍が応募でき、これまでにポーランド、リトアニア、ベラルーシ、フランス、ロシア、アメリカから、そして今年も日本からも受賞者が出ました。

2021年には、ポーランドの歴史研究、外国語書籍、ドキュメンテーション、社会ジャーナリズムの各部門で、7つの賞が授与されました。今回初めて日本人の著作がエントリーされ、沢田和彦著『プロニスワフ・ピウスツキ伝～〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』(ポーランド語訳:バルバラ・スウォムカ Barbara Słomka)が受賞しました。その他の受賞者は、レシエク・ベドナルチュク(Leszek Bednarczuk、言語学者)、アダム・フレボヴィチ(Adam Hlebowicz、歴史学者・ジャーナリスト)、ズビグニェフ・オパツキ(Zbigniew Opacki、19-20世紀の歴史の専門家)、ダリウシュ・ヴェンジン(Dariusz Węgrzyn、現代史専門家)、ヴィオレッタ・ジェレツカ=ミコワイチク(Wioletta Zielecka-Mikołajczyk、ポーランド・ウクライナ・ベラルーシの東方カトリック教会の専門家)、ヨランタ・ジンドウル(Jolanta Żyndul、ポーランド系ユダヤ人の歴史の専門家)の各氏です(アルファベット順、学術書名は省略)。

表彰式、受賞スピーチ、ディプロマ授与式は3時間に及び、非常に厳粛な雰囲気の中で行われました。埼玉の沢田和彦氏、ヴィルニウス政治学院のスタニスワフ・パウクシュタ Stanislaw Paukšta 氏など、インターネットを通じた参加者もいて、審査員や聴衆に生中継で挨拶しました。受賞した7冊のうち、3冊がヴィルニウス(ポーランド語: Wilno)でのポーランド人の文化生活に触れています。オパツキ氏の約800ページの本は、ヴィルニウスにあるステファン・バトリ大学人文学科の歴史で、ここから多くの優れた学者が輩出し、後にポズナン、トルン、ワルシャワで教鞭をとりました。同じ主人公の本が2冊、沢田教授の上記の本と、ヨランタ・ジンドウル編『プロニスワフ・ピウスツキ日記1885-1887』があります。

沢田先生の著書への賛辞は、元駐日大使で、現在スレヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカが述べました。

マリツキ教授とロドヴィッチ博士の間で、将来、受賞者と「イースタンレビュー」誌、博物館の間で合意された時期にユゼフ・ピウスツキ博物館で沢田教授に直接ディプロマを贈呈することが合意されました。

(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ) [安藤厚訳]



皆様今晚は、私は日本の国立埼玉大学名誉教授の沢田和彦です。

まず第一に、ワルシャワ大学東欧研究センター長、ヤン・マリツキ教授をはじめとするセンター員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

本日は授賞式でスピーチさせていただくことをとてもうれしく、名誉に思います。

私は今から40年以上前の大学院時代にプロニスワフ・ピウスツキと巡り合いました。当時私はロシア文学を専攻しており、二葉亭四迷という人物に興味を持っていました。彼は日本の最初の優れたロシア文学者、翻訳家であり、有名な作家でもありました。そしてピウスツキが1906年に8カ月間日本に滞在した時、もっとも親しい友人として物心両面で彼に援助を与えたのが二葉亭

だったのです。

本日は、プロニスワフ・ピウスツキとはどのような人間だったのか、についてお話ししたいと思います。

強靱な精神

第一に、ピウスツキは強靱な精神の持ち主でした。彼はサンクト・ペテルブルグの学生時代にツアー暗殺未遂事件に加わった嫌疑で逮捕されましたが、その時作成された彼の調書で身体の記録は次のとおりです。

「身長2アルシンあまり[約187センチ]…身体の特徴はくー やせぎすの顔[中略]四 胸の発達著しく脆弱で、肋骨と鎖骨が突き出ている。[中略]七 両腕と両足の筋肉の発達著しく脆弱である…」

このような肉体で10年にわたるサハリン島流刑、さらに3年間のサハリン島調査にピウスツキは耐え抜きました。その強靱な精神の素地となったのは、子供時代に母マリアから受けた家庭教育です。母は祖国愛に

貫かれ、ロシアのツァーリズムに対する敵意を生涯捨てませんでした。彼女は子供たちに幼い頃からポーランドの歴史と文学を教えました。後にプロニスワフの弟ユゼフはこう書き残しています。「母は私たちに自立した思考力を培い、個人尊厳の感覚の涵養に努めた。」

またロシア化されたヴィルノ第一男子古典中学校でプロニスワフが味わった数多くの艱難辛苦も、彼の強靱な精神を培った要素として挙げることができるでしょう。

子供好き

第二に、ピウスツキは子供への愛情、子供とすぐに仲良くなれる能力を備えていました。それゆえ彼はサハリンで流刑囚と官吏の子供たちの家庭教師をつとめ、先住民のギリヤーク(ニヴフ)や樺太アイヌの子供たちのために識字学校を創立させました。さらにこの能力は、ピウスツキの民族学調査において大いに威力を発揮することになります。初めて訪れた先住民の集落で、最初に子供たちが彼に近づいてきて、次にその母親たち、そして最後に父親たちが彼の元にやって来たのです。

仲介者の役割

第三の特徴は、敵対する者同士を仲介し、和解を模

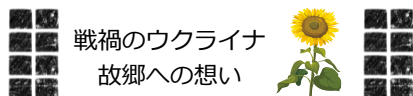
索し、統合を志向するという役回りを、ピウスツキが生涯担ったことです。この仲介者という役割は、例えばサハリンの流刑囚の間でありとあらゆる揉め事が起こった際に、彼が果たそうとしたものです。

また、第一次世界大戦開戦後のヨーロッパでポーランド人は、ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、スイスのローザンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、弟ユゼフ・ピウスツキをリーダーとするポーランド社会党系の親オーストリア派が、それぞれの思惑で自分たちの国家や社会の再建を果たすべくしのぎを削っていました。その時にもプロニスワフは不得手な政治に手を染め、仲介者としての独自の政治的役割を果たそうとしましたが、これは成功しませんでした。そしてこの挫折が最終的に彼の命を奪い去りました。

プロニスワフ・ピウスツキは革命家にも政治家にも向いていなかったと思います。彼は時代の波に翻弄された、心優しき研究者でした。

終わりに、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカさん、バルバラ・スウォムカさん、ダヌタ・オニシュキェヴィチさんに心より感謝申し上げます。

ご清聴有難うございました。 (さわだ・かずひこ)



在外ウクライナ人の意識の流れ



ニーナ・ペトリシェヴァ



皆さん、自分の家族や友人のうち、何人が自分の出身地やその周辺に住んでいるのか、気にしたことはありますか？ その一人一人が今どこにいるのか、四六時中、常に意識していますか？ また、あなたは1日に何回ニュースを読みますか？ 日本には、あなたの街の最新情報を24時間放送してくれるメッセンジャーグループがありますか？

2月24日以前は、誰がどこに居るかなんて考えもしなかったのに…。ウクライナのニュースを読むのは2～3日に1回でした。ところが2月下旬のある恐ろしい、想像を絶する夜がすべてを変えたのです。もう5カ月も前から、私は数時間おきにハルキウのニュースを読んでいます。昼も夜も。そして家族や友人の居場所を正確に知るようになっています。

なぜなら、私の街はロシア連邦から40km のところにあつて、隣国の領土から巡航ミサイルが私の街に飛んでくるからです。1日に2～12発も。さまざまな時刻に、さまざまな地域へ。日中は、人々が働く地域へ。夜中は、人々が眠る地域へ。深夜0時とか、未明の3時とかに。ですから、みんないつシェルタ

ーに駆け込めばいいのかわかりません。

また、私の街は絶えず多連装ロケット砲で砲撃されています。ラッシュアワーにバス停が狙われるのです。そこで、砲撃の報道があるたびに、その時砲撃された地域にいる友人や知人がいつメッセージを送ってきたか、探すようになりました。砲撃のあと、メッセージがあればいいのですが、無ければ待つしかありません。だっていつもいつも「生きてるの？」なんてメールできませんし…。

でも、戦争は私に心配や恐れを教えただけでなく、感謝することも教えてくれました。今日誰も殺されなかったことを神に感謝。便りをくれた友人に感謝。私の母国へ効果的な支援をしてくれている近隣諸国や遠方の国々に感謝。特に、良き隣人であるポーランドと、この22年間で私の母国になった日本に感謝です。

でも、この支援と、それがウクライナ人にとってどんな意味を持つかについては、次回に書きたいと思います。もしご興味をお持ちいただけましたなら。

(Nina Petrishcheva、中京大学教授、ウクライナ・ハルキウ市出身)[安藤厚訳]

Awarding ceremony of the “Eastern Review Prize” for prof. Sawada’s book “Story of Bronislaw Piłsudski, A Pole named the King of Ainu”

On the 2nd July the awarding ceremony of the 29th edition of the “Eastern Review Prize” took place in the Old Library of the Warsaw University. It is a prestigious prize established in 1994 by the historical Quarterly “Eastern Review” for the best book in the field of Eastern Europe Studies and each year many publishers and authors apply for it, in the field of history, law, political studies, and ethnology. The Head of the Jury for the Prize was prof. Jan Malicki, who was a Host of the Ceremony.

Books from many countries can be submitted, so far the laureates came from Poland, Lithuania, Belarus, France, Russia, the USA, and this year also from Japan.

In 2021 the jury awarded 7 Prizes in the categories of historical studies in Poland, foreign books, documentation, and social journalism. For the first time, there was an entry of a book by a Japanese author, and Sawada Kazuhiko was awarded for his book “Story of Bronislaw Piłsudski, A Pole named the King of Ainu”, translated into Polish by Barbara Słomka. Other laureates were (in alphabetic order, academic titles omitted) Leszek Bednarczuk – linguist, Adam Hlebowicz – historian and journalist, Zbigniew Opacki – historian of 19th-20th Century, Dariusz Węgrzyn – a specialist in the newest history, Wioletta Zielecka-Mikołajczyk – specialist in the history of Greek Catholic Church in Poland, Ukraine and Belarus, and Jolanta Żyndul – specialist in the history of Polish Jews.

Laudatory speeches and acceptance speeches, with the ceremony of the conferring of the diploma, lasted for 3 hours and were very solemn. Some of the participants connected via the internet, e.g. Sawada Kazuhiko from Saitama, who greeted the jury and the audience live, and dr. Stanisław Paukšta from the Institute of Political Studies in Vilnius. Of 7 awarded books 3 touched on the Polish cultural life in Vilnius (Polish Wilno). Zbigniew Opacki’s almost 800 pages book is the history of the Department of Humanities in the Stefan Batory University in Wilno, from which many outstanding academics came and later taught in Poznań, Toruń, and Warsaw. Two books had the same hero: the above-mentioned book by prof. Sawada, and “Bronisław Piłsudski Diary 1885-1887” edited by Jolanta Żyndul.

For prof. Sawada’s book a laudatory speech was announced by former Ambassador Jadwiga Rodowicz-Czechowska, at present director of the Development Division in the Józef Piłsudski Museum in Sulejów. It was agreed between prof. Malicki and Rodowicz-Czechowska, that the diploma will be presented to prof. Sawada in person, in the future, at Jozef Piłsudski Museum in Sulejów, at any time agreed between the Laureate, the “Eastern Review” and the museum.

Jadwiga Rodowicz-Czechowska,
The Józef Piłsudski Museum in Sulejów